

「新成人期」とは何か

—J.アーネット『新成人期: 10代後半から20代への道のりは平坦ではない』—

井上慧真

Jeffrey J. Arnett

Emerging Adulthood: The Winding Road from the Late Teens through the Twenties

(New York: Oxford University Press, 2004)

Ema INOUE

1. はじめに

近年、高等教育への進学率上昇や平均初婚年齢の上昇といったライフイベントの変化が、多くの国々で見られる。日本でも、高等教育進学率は17% (1960年) から53% (2013年) に上昇し、平均初婚年齢は夫22.8歳、妻20.3歳 (1960年) から夫28.2歳、妻26.1歳 (2013年) に上昇している。これらのライフイベントの変化により、子どもは親との同居や援助を受ける期間が長くなり、「自立の遅れ」や「親への依存の長期化」が問題とされる (宮本 2004)。また未婚で親と同居する若者を指して「パラサイト・シングル」 (山田 1999) のような新しい社会的なカテゴリも作られた。しかし、他方で、10代から20代での親との良好な関係を示す知見もある (米村 2010; NHK 放送文化研究所 2013)。例えば、「NHK 中学生・高校生の生活と意識調査 2012」によると、10代では、相談相手に親を選ぶ、また親との仲が良いという中高生が以前の調査に比して増加している (NHK 放送文化研究所 2013)。移行期の若者の親密な家族関係を、親への依存の高まりとしてひとくくりには見なせないのではないか。

ジェフリー・アーネットが2004年に著わした *Emerging Adulthood: The Winding Road from the Late Teens through the Twenties* は、10代後半から20代の若者と彼等の家族関係について新たな視点を提供する。本書は、青年期と成人期に生じつつあり、かつそのどちらの時期とも異なる特徴を持つ「新成人期」 (emerging adulthood) についての初めての包括的な概説書である。新成人期とは10代後半から20代の時期であり、従来青年期から成人期への「移行期」などとして扱われてきたが、今ではアイデンティティを探索する中心的な時期になっている。また、新成人期は、定位家族・生殖家族の双方から相対的に自由な時期であり、定位家族とくに親との間に「新しい親密性」が生じる。本書に関しては複数書評がされている (Bethany 2007; Twenge 2008) が、本稿では、著者及び本書の理論的な位置づけ・章構成について整理した後、特に親と新成人期の若者の「新しい親密性」という概念に注目し、(1) その定義 (2) 若者の家族形成やキャリア選択に果たす役割 (3) 特に困難な家庭背景の若者への重要性についてのアーネットの本書での議論を整理する。そして、アーネットの新成人期・新しい親密性の議論への (1) 批判、(2) 日本の状況に適應する場合の可能性について考える。

2. 本書の理論的な位置づけ

アーネットはミシガン州立大学で学士（心理学）、ヴァージニア大学で修士（発達心理学）、同大学で博士号（発達心理学）を取得し、Oglethorpe 大学で准教授として1986年から1989年まで勤務した。1989年から1992年まで postdoctoral fellow としてシカゴ大に3年間在籍し、同じく1989年から1992年に The Rush-Presbyterian-St. Luke's Medical Center に Research Associate として在籍した後、1992年から1998年までミズーリ大学の間人発達・家族研究学部に准教授を務めた。現在はクラーク大学心理学部の教授である。スタンフォード大、及びメリーランド大の客員教授を務めている。

「新成人期」という語はアーネットによるものである (Arnett and Taber 1994)。本書以外にも新成人期の性質について多くの調査をしてきた (Arnett and Taber 1994; Arnett 1994, 1997, 1998, 2000a, 2000b, 2007, 2009, 2011a, 2011b, 2012)。新成人期についての研究は急速に拡大しつつあり (Arnett 2004:4)、近年では心理学だけでなく社会学や人類学・教育学・医学などの分野でも新成人期 (emerging adulthood) という言葉が用いられる。例えば、Arnett (2000) は、2011年10月時点で2300回以上引用されている (Arnett 2012)。ライフコースの社会学・社会心理学の研究両方の動向を整理した Macmillan (2006) では、アーネットの提唱する新成人期が、従来ブラックボックスとされてきた青年期から成人期への移行時期のアイデンティティと自己についての理論として「もっとも重要」(Macmillan2006:20) とした。

アーネットの「新成人期」の議論以前には、10代後半から20代は、青年期を経てアイデンティティが確立され、パートナーと親密な関係を形成する時期と考えられてきた。エリクソンによれば、青年期は「アイデンティティ 対 役割混乱」という、仕事や愛情に関して様々な役割実験を通じてアイデンティティを確立する時期である。そして成人期は「親密性 対 孤立」の時期であり、青年期に確立されたアイデンティティがあつてはじめて、他者と親密で生涯持続するコミットメントを形成することができる (Erikson [1950] 1963=1978/1980, 1968=1969)。しかし現在では、卒業・就職・結婚といったライフイベントを経験する年齢が上がり、またライフイベントを経験する年齢も個人により多様化している。このため、青年期にアイデンティティが確立されるというエリクソンの図式は当てはまらなくなっている。

10代後半から20代の時期をさす用語としては、後期青年期 (late adolescence) (Erikson 1968=1969)、ユース期 (Keniston 1971=1977)、成人前期 (young adulthood) (Levinson 1978=1980)、それに移行期などの用語がある。しかしアーネットは、後期青年期や成人前期では「青年期」「成人期」のどちらかと関連付けて考えていて、またユース期に関しては1960年代の時代背景の影響が強いという問題を指摘している。アーネットは新成人期という用語により、10代後半から20代の独自性を明確にし、研究対象としての関心を喚起しようとしている。

3. 本書の構成

本書は10章から成っている。第1章「長くなった成人期への道程 (A Longer Road to Adulthood)」では、新成人期という概念と従来の諸概念との差異、この語を用いる意義について

て説明されている。第2章「新成人とはどのようなものか (What it is Like to Be an Emerging Adult?)」では、インタビュー調査から4人の新成人期の時期の若者の現在に至るまでの履歴や将来展望を記述する。第3章「葛藤から仲間へ：親との新しい関係 (From Conflict to Companionship: A New Relationship with Parents)」では親との関係を中心に述べられる。第4章「愛と性 (Love and Sex)」ではパートナーとの関係が、第5章「結婚への回り道 (Meandering Toward Marriage)」では結婚相手に求める条件の変化、男女の意識差、親・社会からの結婚圧力の変化、それに自分の親などの離婚経験が結婚意識に与える影響が述べられる。第6章「大学での道程 (The Road Through College)」では、例えば専攻の選択や変更のような学問への志向形成、及び大学の留年や中退について、第7章「仕事 (Work)」では新成人期の職業選択の価値観について、第8章「宗教信条と価値観の源 (Sources of Meaning Religious Beliefs and Values)」では宗教や集団主義／個人主義といった価値観についての新成人期の意識とそのエスニシティ等による差、について、第9章「可能性の時期—4つのケーススタディ (The Age of Possibilities Four Case Studies)」では困難な背景で育った人の新成人期について、第10章「新成人期から成人前期へ—大人になるとはどのような意味か? (From Emerging Adulthood to Young Adulthood What does It Mean to Become an Adult?)」では、インタビュー対象者の「大人になること」への肯定的・否定的な意識について議論されている。

4. 分析と知見

4.1. 「新しい親密性」とは何か

本書で注目すべき重要点のひとつと考えられるのは、新成人期の時期の若者の親との関係性に変容する—「新しい親密性 (new intimacy)」が確立する点、そしてこの「新しい親密性」が若者のキャリア選択・家族形成にも影響を与える点である。

アメリカでは一般的に、18歳から19歳で離家する。これは1970年代ころから広まった比較的新しい現象であるが、離家により家族や家事責任をめぐる摩擦が減少し、一般に親との関係が改善される。青年期のような親との葛藤はあまり見られなくなり、かわって「新しい親密性」が新成人期の特徴となる。親は子どもへの命令的かかわりを止めて支援することが中心になり、子どもも親の言うことにすべて従うのではなく、選択的に取り入れるようになる。親子の非対称的な役割により厳密に定義された関係から、平等、または平等に近い状態へと関係が変化する (Arnett 2004:47-74)。この点については第3章で中心的に扱われているが、それ以外の各章でも多く言及されている。

新成人期を青年期や成人期から分かつ5つの特徴として、アーネットは(1)アイデンティティ探索 (identity exploration) (2)不安定さ (instability)、(3)自己焦点化 (self-focused)、(4)宙づり (in-between) (5)可能性 (possibility) をあげているが、この5つの特徴はどれも、「新しい親密性」の確立という、新成人期の若者と親との関係から浮き彫りになるものである。

新成人期の若者は、まだ将来の経済的・社会的地位の見通しが不安定であり、親への経済的依存が続いていることが多い。このため、彼らは自らをまだ成人であるとは感じていない。し

かし、彼らの多くは、離家することにより定位家族から出ており、かつまだ結婚したり子どもを持つたりしていないため、新しい家族責任にもコミットしていない。新成人期には、親から多くの制約を受ける青年期や、結婚・出産によってパートナーや子に対する家族責任が生じる成人期と異なり、多くの可能性が開かれている。新成人期の若者は自分がもはや青年ではないが、まだ成人ではないと感じやすい。この意味で新成人期は宙ぶりの時期であるが、同時に新成人期の若者は家族責任から離れて自己に焦点化し、アイデンティティの探索を行うことができる。特に、困難な家庭状況で育った若者にとっては、人生を変容させる可能性がある時期として新成人期が重要である。

4.2. 「新しい親密性」と新成人期の家族形成

親とのあいだに確立される「新しい親密性」は、若者の家族形成やキャリア選択にどのようにして影響するのだろうか？アーネットは成人生活の柱として愛情、仕事、宗教の3つをあげている (Arnett 2004:114) が、本稿では特に、愛情と仕事に注目し、親と「新しい親密性」を確立することと家族形成、キャリア選択との関係をみる。

新成人期の若者は、自身の育った家庭でこれまでに経験してきたライフイベントを客観的に捉え直し始める。本書でその重要な例として扱われているのが両親の離婚である(第5章)。両親の離婚は、痛みを伴う出来事として負の影響を与えるとみなされてきた。しかし本書のインタビューの結果からは別の側面があらわれている。親と子という役割関係を離れて対等な人間として親の離婚を見られるようになることから、「結婚生活において何を避けるべきか」(Arnett 2004:114) を学ぶ。そしてこれは、実際に新成人期の若者がパートナーを選択し、関係を形成する行動にも影響を与える。例えば、若者は離婚を回避するために、結婚する前に自分とパートナーの相性を確認する必要があると考えて、そのために同棲という手段を用いる。親が同棲に反対する場合には、若者はパートナーの住居か自分の住居のどちらかで事実上同棲することや、あるいは親から経済的に自立を図ることで親の影響を弱めることといった対抗戦略をとることが多い (Arnett 2004:107-112)。

平均初婚年齢や初子をもつ年齢が上昇している原因として、高等教育の拡大や産児制限が普及していることがあげられることが多い。しかし、アーネットは「成人になること、及び配偶者や親といった役割に入ることが持つ意味や価値の、深層での変化」(Arnett 2004:4) が起きていることも原因であるとする。この意味や価値の深層での変化とは、具体的には若者が他者に人生と運命のコミットメントをする前に自らの人生を軌道に乗せたいと考えることである (Arnett 2004:101)。新成人期の若者は自らの家族形成についてさまざまな可能性をもち、そこから選択を行う。そしてこの選択は真空状態でなされるのではなく、離婚など親のライフイベントも新成人期の若者が自らの家族形成について考える重要な参照点となる。

4.3. 「新しい親密性」と新成人期のキャリア選択

高等教育の期間は職業の重要性について真剣に検討し始める時期であり、アイデンティティ探索が集中的に行われる期間である。新成人期に行われる大学での専攻の選択や職業の選択(第6章・第7章)には、親の影響力は限定的である。親の意向や勧めにより大学での専攻や職業を選択した場合には、やがて不適合と感ずることも多い (Arnett 2004:124, 154)。その際に

「自分自身は本当のところ何がしたいのか？」(Arnett 2004:125)という問いが生じる。例えば、本書に出てくるアジア系アメリカ人の大学生の女性は、親から法律家か医師になることを期待されて育った。そして「姉が医者になるというので、『じゃあ私は法律家になる』と言った」(Arnett 2004:124)しかし大学入学後、法学に関心が持てないということに気が付き、何を専攻するのかを再検討し始めた。いくつかの専攻を経て、最終的にはダンスという「できるだけ法律から離れた」(Arnett 2004:125)分野を修めて卒業し、現在のモデルや女優の仕事に活かしている。新成人期は、親がキャリア選択に対してもつ影響力が青年期よりも弱まり、若者自身が親の意向や勧めから独立して、自分のキャリアを検討し始める時期である。

4.4. 困難を抱える家庭出身の若者と「新しい親密性」

困難を抱える家庭出身の若者に、親との間に「新しい親密性」を形成することは可能なのだろうか？第9章では4つのケーススタディを通じてこの問題が検討される。アーネットは困難を抱える家庭出身の若者と「新しい親密性」の関係について9章で明確に言及しているわけではない。しかし、困難を抱える家庭出身の若者にとっても新成人期は親との関係を再構成する時期であり、重要であると指摘している。新成人期になると、離家して独力で生きていくことが可能になる。「親の問題は、もはや彼らの問題ではなくなる」(Arnett 2004:189)し、「自らの生活を変容させ、親とは異なる道筋を歩み出せる」(Arnett 2004:189)ために、むしろ有利な家庭の子どもよりこの時期が重要であるとしている。4つのケースの1つであるニコルの場合、彼女は結婚と離婚、そして出産を繰り返す母親のもとに育ち、精神疾患を抱えるその母親に代わり下の兄弟姉妹の面倒を見てきた。しかし、彼女は新成人期にフルタイムの仕事を見つけ、家を出る。そしてそのときの心情について彼女はアーネットのインタビューに対し、

「私は自由を経験する必要性があったのです。学ぶために母の家を出る必要がありました。家を出るまでは学ぶスキルを本当に身に着けることはできなかった。」(Arnett 2004:195)
「私が家を出てうまくいくためには、1人きりでいる必要があったのです。」(Arnett 2004:195)

と答えている。彼女はフルタイムの仕事をしながら夜間の大学に通っており、学業を修めるのに苦労しているが、「どれだけかかっても学位をとる」(Arnett 2004:195)と答えている。最終的な目標は専攻の心理学分野で博士号をとり、相談・援助機関を主宰したいと考えている。精神疾患にかかって変わってしまった母親への思いがある (Arnett 2004:196)。他の3ケースではそれぞれ親とのあいだに抱えている困難はこれとは異なるが、アーネットはいずれのケースにおいても、親とのあいだに距離をおき、若者が親との関係を客観視し始めるという点で「新しい親密性」か、それに近いものを同様に認めていると考えられる。

5. アーネットの新成人期への批判

アーネットの新成人期の概念は、若者自身の心理的な要素を重視する。例えば、第1章では

新成人期の特徴として、(1)アイデンティティ探索 (identity exploration)、(2)不安定さ (instability)、(3)自己焦点化 (self-focused)、(4)宙づり (in-between)、(5)可能性 (possibility) が挙げられている。一方で、社会学研究からは、例えば卒業や結婚、離家のようなライフイベントは依然として若者が自らを「成人である」とみなす基準として重要性をもち、アーネットはライフイベントの重要性を軽視しているという批判がある (Hartmann and Swartz 2006)。

アーネットは社会構造から生じる若者の間での差異を軽視しているという批判もある。(Bynner 2005; Macmillan 2006; Benson and Furstenberg 2006; Hartmann and Swartz 2006)。例えば、高等教育に進学せず就職する人や、10代前半で子どもを持った人にも新成人期は存在するのだろうか？実際に、彼らはより自分の将来の機会が制約されていると感じているという結果もある (Hartmann and Swartz 2006:264)。本書のインタビューでも、多様なエスニシティを持つ若者にインタビューしているものの、ジェンダーやエスニシティによる差異についての分析は、宗教など特定の話題に限られている。アーネットの新成人期の分析枠組み自体が白人を対象とした調査から作られた (Arnett 1998) こともあり、社会階級やエスニシティの問題を十分に考慮しているとはいえない。社会階級やエスニシティの問題はアーネット自身も後の論文でこれからの研究課題として述べている (Arnett 2012:238-239)。

6. 本書から日本の家族・若者研究への示唆

前節ではアメリカにおけるアーネットの新成人期の理論への批判を紹介した。本章では、アーネットの新成人期、そして新成人期に親と若者とのあいだに確立されるという新しい親密性の、日本への適用可能性を検討する。

アーネットは若者の「成人になるとはどういうことか」という意識に関心を持ち、質問紙法・構造化面接法・そして本書のような自由面接法などの方法で探究してきた。質問紙調査では、約30項目から「成人と考えられるようになる前に達成されるべきこと」を回答者に選択させた。その結果、「親などの影響から独立して自分の信条・価値観を決める」「親から経済的に独立する」「親と対等な関係を確立できる」などの項目がいずれも60%以上の回答者に選択され、親との関係が「成人であること」の重要な規準として考えられていることが明らかになった (Arnett and Taber 1994; Arnett 1997, 1998)。そして、本書では新成人期の若者と親との関係の特徴として「新しい親密性」という概念を導入し、「新しい親密性」が、家族形成や職業選択など新成人期の若者の行う様々な選択に重要な役割を果たすことが明らかにされた。

日本の新成人期の若者が「成人になるとはどういうことか」を考える際に、本書で「新しい親密性」として表わされたような親との関係の確立はどの程度重要視されているのだろうか。10代後半から20代の若者の親との関係には、日本とアメリカでは差異がある。例えば、離家に関して、アメリカでは18歳くらいでの離家が一般的であり、離家は個人の自立や「独立独行」という価値を実現する行動と考えられている (Bellah 1985=1991:72) しか一方、日本では、18歳で離家するという規範はない (宮本 2004)。20代・30代の未婚者では親との同居率が高く、いったん進学や就職により離家してもまた戻ってくる場合も多い (岩上 1999)。また、

成人期の子と親との同居でも、親子が経済的に相互依存関係を続ける傾向がある¹(岩井 2011)。離家した後若者が親と再び同居するという現象は、日本だけでなく多くの先進諸国で見られる²。従来18歳ごろに離家することが規範とされてきたアメリカでも、近年では大学を卒業した若者の85%が、卒業後に実家に戻るといふ³(Newman 2012=2013)。

いったん離家しても再び親と同居することは、親への依存から自立へという直線的な移行が各国で成り立たなくなっていることの例として考えられないだろうか。本稿第5章でとりあげたアーネットへの批判にあったように、卒業、結婚、離家のようなライフイベントは確かに依然重要性を失っていない。しかしライフイベントの経験は人により多様化し、若者が「成人になるとはどういうことか」を認識することは難しくなっている。

アーネットが本書で示した「新成人期」及び「新しい親密性」という概念は、10代後半から20代という年齢層の若者における親との関係を捉えるうえで、重要なものになるだろう。10代後半から20代の若者は、たとえ親と同居していても、その関係は青年期の親子関係とは異なるのではないか。青年期より子どもの判断や自由、そしてプライバシーは尊重されるのではないか。経済的なやりとりも、交渉によりルールが定められているかもしれない。10代後半から20代を「新成人期」として捉え、その親子関係—「新しい親密性」を探ることは、依存から自立へという直線的な形をとらなくなりつつある日本の、そして先進諸国の親子関係を捉えるうえで重要な枠組みになるのではないだろうか。

<注>

- 1 子ども世代が一定の経済的安定を得ているという前提の下での「豊かな同居」であった。しかし1990年代後半以降、子ども世代の就業機会の悪化、晩婚化、非婚化などにより、この「豊かな同居」の前提が揺らいでいる。2005年のSSM調査では、世帯所得により高齢者の本人所得の格差が是正される傾向が弱まり、また世帯所得300-400万円層では、子と同居しても世帯所得が上昇しなかった(岩井 2011)
- 2 Newman(2012=2013)では成人した親と子どもからなる複数世代の同居世帯を「アコーディオン・ファミリー」と呼んでいる。ただし、国家が若者への教育費や住宅費の援助しているスウェーデンやデンマークでは、「アコーディオン・ファミリー」はみられないとされる。
- 3 離家して再び親と同居する子どもは「ブーメラン・キッズ」と呼ばれる。大学を卒業した子どもが再び親と同居する現象は、アメリカのミドルクラスで多く見られる。大学を卒業した子どもが再び同居する理由には、よりよいキャリアのために大学院への進学を準備する場合、1人で暮らすための資金をためている場合などがあげられる。親も、子どもが将来のために努力していることを条件に、再び同居することを認め、同居子を積極的に援助する傾向がある(Newman 2012=2013)。

<文献>

- Arnett, Jeffrey J. and Susan Taber, 1994, "Are College Students Adults? Their Conceptions of the Transition to Adulthood," *Journal of Adult Development*, 1(4):213-224.
- Arnett, Jeffrey J., 1994, "Adolescence Terminable and Interminable: When Does Adolescence End?," *Journal of Youth and Adolescence*, 23(5):517-535.
- , 1997, "Young People's Conceptions of the Transition to Adulthood," *Youth & Society*, 29(1):3-23.
- , 1998, "Learning to Stand Alone: The Contemporary American Transition to Adulthood in Cultural and Historical Context," *Human Development*, 41:295-315.
- , 2000, "High Hopes in a Grim World: Emerging Adults' Views of Their Futures and 'Generation X'," *Youth & Society*, 31(3):267-286.
- , 2000, "Emerging Adulthood: A Theory of Development from the Late Teens Through the Twenties," *American Psychologist*, 55(5):469-480.
- , 2004, *Emerging Adulthood: The Winding Road from the Late Teens through the Twenties*, New York: Oxford University Press.
- , 2007, "Emerging Adulthood: What Is It, and What Is It Good For?," *Child Development Perspectives*, 1(2):68-73.
- , 2009, "The Emergence of 'Emerging Adulthood': The New Life Stage Between Adolescence and Young Adulthood," Andy Furlong ed., *Handbook of Youth and Young Adulthood*, London: Routledge, 39-45.
- Arnett, Jeffrey J. and Hendry Kloep, 2011, *Debating Emerging Adulthood: Stage or Process?*, New York: Oxford University Press.
- Arnett, Jeffrey J., 2011, "Emerging Adulthood(s): The Cultural Psychology of a New Life Stage," Lean J. Arnett ed., *Bridging Cultural and Developmental Approaches to Psychology: New Syntheses in Theory, Research and Policy*, New York: Oxford University Press: 255-275.
- , 2012, "New Horizons in Emerging and Young Adulthood," Both Alan, Susan L. Brown, Nancy S. Landale, Wendy D. Manning and Susan M. McHale eds., *Early Adulthood In a Family Context*, New York: Springer, 231-244.
- Bellah, Robert N., Richard Madsen, William M. Sullivan, Ann Swidler and Steven M. Tipton, 1985, *Habits of The Heart: Individualism and Commitment in American Life*, Berkley: University of California Press. (=1991, 島菌進・中村圭志訳『心の習慣——アメリカ個人主義のゆくえ』みすず書房.)
- Benson, Janel E. and Furstenberg F. Frank, 2006, "Entry into Adulthood: Are Adult Role Transitions Meaningful Markers of Adult Identity?" in Macmillan Ross ed., *Advances in Life Course Research vol 11*, Amsterdam: Elsevier Press,

199-223.

- Bethany, Lee R., 2007, "Book Review Introduction: Jeffrey Jensen Arnett, *Emerging Adulthood: The Winding Road from the Late Teens through the Twenties*," *Qualitative Social Work*, 6(2): 250-253.
- Bynner, John, 2005, "Rethinking the Youth Phase of the Life-course: The Case for Emerging Adulthood?," *Journal of Youth Studies*, 8(4):367-384.
- Erikson, Erik, H., [1950]1963, *Childhood and Society*, New York: W.W.Norton. (=1978/1980 仁科弥生訳『幼児期と社会 I・II』みすず書房.)
- , 1968, *Identity: Youth and Crisis*, New York: W.W.Norton. (=1969, 岩瀬庸理訳『主体性——青年と危機』北望社.)
- Hartmann, Douglas and Teresa T. Swartz, 2006, "The New Adulthood?: The Transition to Adulthood from the Perspective of Transitioning Young Adults," Macmillan Ross ed., *Advances in Life Course Research vol. 11*, Amsterdam: Elsevier Press, 253-286.
- 岩井八郎, 2011, 「高齢者の社会的地位と格差」佐藤嘉倫・尾嶋史章編『現代の階層社会 1 格差と多様性』東京大学出版会, 191-206.
- 岩上真珠, 1999, 「20代, 30代未婚者の親との同居構造分析——第11回出生動向基本調査 独身者調査より」『人口問題研究』55(4):1-15.
- Keniston, Kenneth, 1971, *Youth and Dissent: The Rise of a New Opposition*, New York: Harcourt Brace Jovanovich. (=1977, 高田昭彦・高田素子・草津攻訳『青年の異議申し立て』東京創元社.)
- Levinson, Daniel J., Charlotte N. Darrow, Edward B. Klein, Maria H. Levinson and Braxton Mckee, 1978, *The Seasons of a Man's Life*, New York: Alfred Knopf. (=1980, 南博訳『人生の四季——中年をいかに生きるか』講談社.)
- Macmillan, Ross, 2006, "Constructing Adulthood: Agency and Subjectivity in Adolescence and Adulthood," Macmillan Ross ed., *Advances in Life Course Research vol 11*: Amsterdam, Elsevier Press, 3-27.
- Newman, Katherine S., 2012, *THE ACCORDION FAMILY: Boomerang Kids, Anxious Parents, and the Private Toll of Global Competition*, Boston: Beacon Press. (=2013, 萩原久美子・桑島薫訳『親元暮らしという戦略—アコーディオン・ファミリーの時代』岩波書店.)
- NHK 放送文化研究所編, 2013, 『NHK 中学生・高校生の生活と意識調査 2012——失われた 20 年が生んだ「幸せ」な十代』日本放送文化協会.
- 宮本みち子, 2004, 『ポスト青年期と親子戦略——大人になる意味と形の変容』勁草書房.
- Twenge, Jean M., 2008, "Excellent and Accessible View of Emerging Adulthood," *The American Journal of Psychology*, 121(4):682-687.
- 山田昌弘, 1999, 『パラサイト・シングルの時代』筑摩書房.
- 米村千代, 2010, 「親との同居と自立意識—親子関係の『良好さ』と葛藤」岩上真珠編『<若者と親>の社会学 未婚期の自立を考える』青弓社, 83-104.